

ジャーナリスト鳥集徹さん「フリーのジャーナリストだからできたこと」

古川雅子（フリーライター）

鳥集さんがお書きになっている記事はよく拝見していましたが、生のお話（私はビデオ受講組ですが）を伺うのは初めてで、たいへん興味深く、ためになりました。

私自身、週刊誌をベースに医療や介護などの記事を書くライターですので、ある意味、商売の大事な根っこのところを“盗ませて”もらいました（笑）。

鳥集さんは、医療側との距離、利益相反という部分を意識されながら、記事を書かれていますね。私の場合は、患者側の目線に立って「寄り添う」記事（医療・介護を受ける人や家族の「人権」の記事ですね）が多いため、次のようなことを心がけています。

- ・患者側の視点に染まりすぎてまわりが見えない状態にはしないこと
- ・権利の主張だけでなく、切実なポイントは何なのか、足りないところはどこなのかを明確にし、具体的に書くこと
- ・心情のひだは丁寧に書くけれど、決して美談におとしめず、普遍性のあることに焦点を当てること
- ・具体的に役立った、まわりの支援（ささいなことでも）を必ず盛り込むこと
- ・商品として「キャッチー」な見出しや文章の仕立て方は意識するけれど、患者さんのストーリーをそちらに強引にひっぱって曲げるようなことはしないこと
- ・だからこそ、どんな当事者に、どこに焦点を当てて話を聞くかという「人選」がすべてで、当たり前ではありますが、そのためには人のネットワークと日頃からいろいろな人のおつきあい、雑談が大事なこと

鳥集さんが「報道の中立性？ 客観的報道？」とクエスチョンマークをつけられている意図は、私なりに理解しているつもりです。そこは誰しも葛藤ですし、主観の押しつけはNGなものも暗黙のうち。でもでも、やっぱり記者自身が腹に持つ思想というものが、記事に反映されないはずはなく、逆にその思想を持っていなければ、世間に向かって投げかけをするなんて、怖くてできないというのが、伝える仕事をするものとしての実感です。

私は数年前に、ベトナム戦争の報道写真でLIFEの巻頭を飾ったフォトジャーナリスト、岡村昭彦の「シャッター以前」という言葉に出会いました。朝日新聞の天声人語でも「フィルムの詰め方は知らなかったけれど、どこにレンズを向けるかは知っていた」という語録がとりあげられたこともありました。「私」の軸を固めすぎてひとりよがりになるのは言語道断ではありますが、フリーランスでものを書く仕事をする者としては、このシャッター以前をちゃんと持つこと、それに尽きると思っています。口で言うは易し、ですね。志、ということで。

鳥集さんほどの方でも、さすがに、大野病院事件のブログ炎上の際には堪えたとおっしゃっていましたが、乗り切れたうえに、その後、『ネットで暴走する医師たち』の出版などへと結びつけていかれましたね。首尾一貫して、「シャッター以前」がぴしっと定まっていたからだと感じました。

先輩として尊敬しております。できれば鳥集さんを、びしーっと批判できるぐらいに私もいい仕事をしていきたいです。